

られていたことであろうが、名が見当らないようである。そこで、この者をシロバナアゼトウガラシと新称し、学名は下の如く定めたい。

Vandellia angustifolia Benth. in DC., Prodr. 10: 417 (1846).

forma **leucantha** Hiyama, nov. f.

Corolla candida.

Hab. Hondo: Torami, Prov. Kadzusa (leg. T. Wakana—Sept. 2, 1956—typus in Herb. Nat. Sci. Mus., Tokyo).

○ 屋久島の羊齒フロラに加える (斎木保久, 上野明) Yasuhisa SAIKI & Akira UENO: Several ferns newly found in Is. Yakushima

筆者等は原田利一教授指導下に天野淑子嬢と共に 1956 年 8 月 4 日～11 日迄屋久島に滞在し植物採集したが、従来同島に未記録と思われる羊齒数種を採集したので茲に報告する。

(1) **Polystichum Hancockii** Diels タイワンジウモンジシダ (Fig. 1) 鈴川附近原生林 (海拔 200m 附近), 従来の北限地は沖縄島。生育地は谷の岩上で極稀のもの。附近のシダ相はヘツカシダ, ウスバクジヤク, アツバキノボリシダ, ミヤジマシダ, ヤクシマカグマ, ナンカクラン, ヒモラン等。台湾産のものに比べて小さく葉長 20cm 位で、一株に葉を 10-20 枚位つける。

(2) **Tarachia** spp. (*Asplenium* spp.) (Fig. 2) 上記のシダと殆ど同一個所で矢張個体数は極めて少い。トキワシダ *Tarachia Yoshinagae* H. Ito (*Asplenium Yoshinagae* Makino) に酷似しているが、葉質が軟く黒緑色で葉の切れ込みが著るしい。台湾産のオオトラノオシダ *Tarachia laciniata* H. Ito (*Asplenium* Don) に最も良く似て居り、或は同種とも思われる。

(3) **Pteris Grevilleana** Wallich アシガタシダ (Fig. 3) 中橋 (安房——麦生間) 附近原生林 海拔 200m 附近の地点。従来の北限は石垣島。産量は頗る稀で、やや乾燥した密林中の土上。附近のシダ相はアツバキノボリシダ, ホソバオオカグマ, フササジラン, タイワンクリハラン, コウモリシダ, シンテンウラボシ, ヤリノホラン, ヘツカシダ, ホソバオオタニワタリ, チャボヘゴ, ヒカゲアマクサシダ等。尚屋久島の本種は伊藤洋氏著日本羊齒図鑑第 45 図のものより葉柄の翼がやや発達しない個体である。

(4) **Pteris Cadieri** Christ カワリバアマクサシダ (Fig. 4) 前種と殆ど同一の地点で前種より更に稀。従来の北限は沖縄島。

(5) **Pteris natiensis** Tagawa ヤワラハチジョウシダ (Fig. 5) 屋久島のハチジョウシダ類は葉の厚いハチジョウシダ *Pteris Fauriei* Hieron. 羽片や耳の多いトゲハチジョウシダ *Pteris setuloso-costulata* Hayata 羽片が大きく葉柄の赤くて美しいヒカゲ

アマクサシダ（ウスバハチジヨウシダ）*Pteris Tokioi* Masam.=*P. yakusimensis* Tagawa と本種で、可成隨所で見ることが出来た。殊に中橋附近には多い。葉が歟く羽片の巾が広くて数少く葉面と葉柄が折れ曲る様に着くのが特徴である。

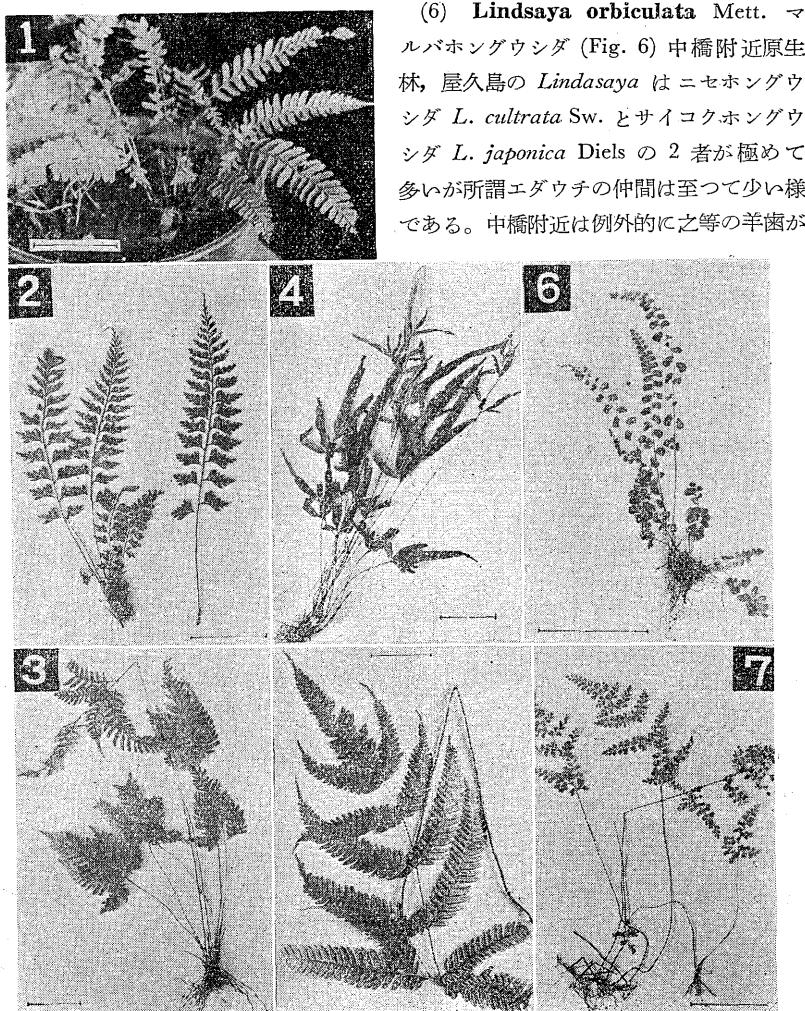


Fig. 1 *Polystichum Hancochii* Diels. Fig. 2. *Tarachia* spp. Fig. 3. *Pteris Grevilleana* Wallich Fig. 4. *Pteris Cadieri* Christ Fig. 5. *Pteris natiensis* Tagawa Fig. 6. *Lindsaya orbiculata* Mett. Fig. 7. *Lindsaya* spp.

図中の scale は全部 5 cm の長さを示す。

多くシンエダウチホングウシダ *L. commixta* Tagawa や、*L. Chienii* Ching var. *deltoidae* Tagawa と共に小群落を作っている。従来の確実な北限地は沖永良部島。

(7) **Lindsaya** spp. (Fig. 7) シンエダウチホングウシダの近縁種。矢張中橋附近の原生林であるが、通常の *Lindsaya* と異り谷より大部離た乾地に生育し可成の群落を作っていた。裂片が小さく連合囊堆は殆ど連続するか、又は少し切れる。葉柄は四稜形なるも生時緑色、根茎は長く這い。やや疎に葉を付けるので他のエダウチの仲間とは明瞭に異なる種類と思われる。目下文献未記録のものと考えられる。

(静岡市小鹿、静岡薬科大学, Shizuoka College of Pharmacy, Oshika Shizuoka)

○ カロリナボプラ (久内清孝) Kiyotaka HISUCHI: *Calorina**[popular as arborescent walk trees of Tokyo.

今まで、いろいろな人から、カロリナ・ボプラのことをきいていたが、朝日新聞社が発行した、並木道という道路樹のことをかいだ本に「都公園緑地部では……風に強いカロリナ・ボプラを大阪から取寄せ、目下北多摩郡の「神代苗圃」で育成につとめている。カロリナ・ボプラはバイ煙にも強く、東京の並木のニュー・フェースとして、その登場が期待されている云々」と書いてあつた。この木は通説では北米東部の *Populus angulata* Aitom = *Calorina papular* として知られている。葉の巾の広い種類で、葉柄の頂部は普通のものより一層上下の方向に平たいので、風で葉がゆれる程度も著しいだろう。もつともこの性質はこの仲間によくある性質なので、いつも風で葉がゆれる。それで日本在来のハコヤナギにツラフリヤナギ

の俗称もあることは中陵漫録十四巻にも出ているし、また中国の古詩にも、微風來則葉皆動とあると記している。そんなことから将来都内のこのボプラがいたるところでツラ(面)をふるさまを思いうかべると、ほほえましくなる。ボプラの葉のゆれることについて洋書にも quiver in the wind とか tremble in the breeze とか表現され、東西と同じような見方をするようである。

